

## 「管理・運営」ハイライト

### 人文学科学生支援体制の構築と運営

法文学部人文学科 吉田 正広 教授

人文学科学生支援コーディネーター（統括）および学部長補佐（学生支援担当）として、人文学科学生支援体制の整備と運営を進めている。

人文学科では、独自の試みとして、平成19年度に「学科等の学生生活支援活動を統括し、学生支援活動の改善及び向上をはかるために」学生支援コーディネーター制度を設置した。また、指導教員と学生とのコミュニケーションを促進するため、【学生生活指導記録】を導入して、各学期の履修登録期間に合わせて、履修指導及び生活指導にかかわる指導教員と学生との直接対話の機会を設けている。さらに、平成20年度より「人文学生支援室」を開設して、非常勤の臨床心理士1名および事務補佐員1名を配置し、人文学科の学生・院生を対象としてカウンセリングを行っている。現在では週二日の相談日はほぼ予約で一杯となるほど、学生の来談者がいる。また、全学の学生支援センターとの連携、授業担当教員との連携、父母との連携など、手探りの状態ながら、学部・学科単位の支援として独自の活動を展開している。

これらの事業は、平成21・22年度愛媛大学教育改革促進事業（愛大GP）「コーディネーター制度を活用した教育・学生支援体制の構築」として採用され、全学の援助の下、実施されている。以上のような人文学科学生支援体制の設計から現在の運営、さらには愛大GPの申請書作成及び成果報告において中心的な役割を果たしている。

さらに、法文学部研究科人文科学専攻の教育改革を現在実施しており、平成22年度愛媛大学教育改革促進事業（愛大GP）「教育の実質化を図るためのカリキュラム構築と形成的アセスメントの導入」に採択されている。この事業では、修士論文作成指導における形成的アセスメントの導入が重要な項目となっている。特に、修士論文作成過程における3段階の発表会（「構想発表会」「中間発表会」「研究成果発表会」）と関連させて、【研究指導計画書】を作成し、教員による達成度確認とそれに基づいた研究指導計画の修正過程を通じて、適切な修士論文指導を目指している。この事業の設計から運営においても中心的な役割を果たしている。

その他、法文学部学生支援委員、インターンシップ委員として、幅広い学生支援活動を実施している。

### 理学部の安全衛生管理活動推進

理工学研究科(理学系) 淵崎 員弘 教授

理学部安全衛生管理のためのシステム母体を立ち上げられたのは前任者の東先生である。これには化学薬品の管理のシステムも含まれる。そのご苦労を考えれば、むしろ前任者の活動こそが評価されるべきである。報告者は、平成20年度からこうした活動を引き継ぐことになった。前任者のご期待を裏切らないように努力したつもりである。自身の不勉強のため、安全衛生活動の内容から理解しなければならなかった。安全衛生管理室主催の講演会、セミナーには時間の許す限り参加し、その内容吸収に努めた。中四国安全衛生協議会への参加もこの一環である。各地区での協議会が全国的に組織化され、トップダウン型の情報伝達網が整備されつつある。一方で教員の安全衛生活動に対する意識の差は極めて大きく、重要な情報の周知徹底が行われないという状況があった。そこで、理学部内の巡視員を中心に情報伝達網を整備した。これにより必要な情報はトップダウンで流し、また、巡視活動等における問題点はボトムアップ型で情報を集約できるようになった。平成22年度に立ち上がった理学部安全衛生委員会は、この情報網のバックボーンに他ならない。

この2年間、理学部キャンパスでは増築などの作業が頻繁に行われたが、大きな事故は一件も起こらなかった。適切で地道な巡視活動の賜物であると考えます。また、この間、学生への安全衛生教育はより充実したものになった。高圧ガス管理簿による一元管理システムを作り、高圧ガスボンベの厳正な管理に対応した。こうした活動に携わっている教職員各位にこの場を借りて感謝の意を伝えたい。

## 理学部同窓会活動への貢献

理工学研究科(理学系) 高田 裕美 助教

愛媛大学理学同窓会は、昭和 24 年創立の文理学部理学科および昭和 43 年改組設立された理学部の卒業生・修了生の集まりとして、昭和 54 年から活動している。現在では会員数約 7000 名となり、会員相互の親睦と理学部の発展に資することを目的としている。しかし、ここ 10 年間ほどは、同窓会活動の要とも言える新規卒業生の連絡先がほとんど集まらないなど活動が停滞していた。同窓会会員は貴重な人的資源であり、世代を超えた情報交換、相互協力が活発に行われない状況は、学部・大学にとってもおおきな損失であると考えられた。そこで理学同窓会活性化のため平成 18 年度に本部役員会が組織され、総会の開催、同窓会報の定期的な発行、ホームページの作成を当面の目標として運営することになった。これらの活動を行うにあたり、役員会幹事として会計管理、名簿管理、ホームページ管理、印刷物の手配など多岐にわたって業務を担当している。また数少ない理学部現役教員の同窓会役員として、様々な連絡調整役を努めている。

現在、理学同窓会では、会費は入学時に徴収しているため、回収率はかなり高く経済的には困窮していない。それに対して卒業生の帰属意識の低下から同窓会活動に協力参加する会員数が激減しており事態の改善が必要とされている。具体的な活動としては、まず、新規会員に対して同窓会の存在を強くアピールするため、卒業式当日に学位記に添付していただだけの連絡用ハガキを、理学同窓会のオリジナル封筒に同窓会の必要性を訴える挨拶文とともに記念品や会報などを加えて配付している。また、指導教員に対しても、同窓会活動への協力を依頼する挨拶文を配付している。在学生にも広く同窓会の存在を認識してもらうために、理学部環境整備にあわせて理学部玄関前花壇の記念植栽を行った。

さらに、すべての会員間での親睦をはかるために、隔年で総会・懇親会を開催しており、総会開催後は会報を発行している。総会開催時には多くの会員の参加を促すため、理学部現役教員および退官教員を招待し、理学部に関係の深い教員に講演会を依頼している。平成 20 年度開催の総会では、理学部名誉教授向井和男氏により「抗加齢（アンチエイジング）とビタミン・サプリメント」のタイトルで講演が行われ、約 100 名の参加者があった。平成 22 年度開催予定の総会では、愛媛大学学長の柳澤康信氏の講演が予定されている。

## インドネシアとの国際連携の推進

理工学研究科(理学系) 榊原 正幸 教授

愛媛大学およびインドネシア・ゴロンタロ州立大学との交流協定に基づき、それらの大学との国際連携を大きく推進した。

### (1)ゴロンタロ州立大学理学部における地質学科設立の支援

まず、インドネシア・ゴロンタロ州立大学地質学科設立支援委員会（委員長 理工学研究科 榊原正幸）において、愛媛大学として行うゴロンタロ大学地質学科設立支援の具体案を策定し、それを実施した。その支援の内容は以下の通りである。

実験用具の寄贈：愛媛大学理学部地球科学科が管理する中古の単眼偏光顕微鏡 20 台をゴロンタロ州立大学地質学科に寄贈する。

教員の派遣：平成 22 年から 2 年間（年 2 回×2 週間程度）にわたり、教員を 2 名派遣し、集中講義形式で講義・実習を行う予定である。費用については、学長に経費を上申するほか、外部資金の獲得を図る。

教員の養成：ゴロンタロ州立大学物理学科地質学コースの Sri Maryati 氏の大学院への受け入れを行う。

地質学科の専門教育に必要な教科書を適宜収集し、寄贈する。

### (2)ゴロンタロ州立大学訪問および岩石プレパラート用具材の整備

本年 3 月末に、ゴロンタロ州立大学を訪問し、Nelson Pomalingo 学長、Mahludin H. Baruwadi 副学長、Ramli Utina 理学部長、Asri Arbie 物理学科長および Aziz Salam 国際交流担当教員と愛媛大学の支援に関して話し合った。愛媛大学の支援内容は概ね了承された。また、ゴロンタロ大学地質学教室設立の進展状況が明らかになり、今後の偏光顕微鏡の寄贈手続きおよび連絡責任者が明確になった。さらに、偏光顕微鏡の学生実験のための岩石プレパラート作成具材についても現地で購入し、ゴロンタロ州立大学に寄贈した。

## 「複数クラス・複数教員で実施される共通教育科目のマネジメント」

教育・学生支援機構 庭崎 隆 准教授

次年度の授業立案等の共通教育コーディネーターとしてのルーチンワークの他に、特に以下の科目の立ち上げ・改善・実施に取り組んできた。

- 教育・理・工・農学部・SSC の新入生、約 1000 名を対象とした「数学力テスト」の企画・実施・採点（総勢数十名の教職員が協働で実施）に、リメディアル教育（数学）企画専門委員会の委員長として携わってきた。また、その結果を受けて 5 クラス開講される数学のリメディアル授業「数理と論理の世界（初級微積分）」を 2 名の非常勤講師、5 名の TA、更に SHD スタッフとも連携を取りながら、マネジメントを行ってきた（自らも 2 クラス担当）。
- 初年次科目「スポーツ」における E-fit による授業モデルの開発に、共通教育科目（スポーツ）改革検討専門委員会の委員として、また平成 20～21 年度は愛大 GP のプロジェクト実施責任者として取り組んできた。これらのメンバーには、教育学部教員のみならず総合健康センターや教育・学生支援機構の教職員も含まれる。この学部横断的な体制作りが、他大学に類を見ないスポーツの授業モデルと統一的な指導方法の開発を実現させる一因となった。
- 年間 17 クラス開講される初年次科目「こころと健康」において、大勢の部会メンバーや関係教職員とともにマネジメントに携わってきた。特に、平成 21 年度の立ち上げ時の調整に深く関与し、シラバスの作成や成績評価方法の確立、また学期終了後の成績分布・アンケート結果の分析等を含め、授業の改善や安定化に向けて取り組んだ。
- 理系基礎科目「解析学入門」（農学部対象）において平成 21 年度から導入した習熟度別クラスについて、授業担当教員 3 名と毎回の授業前後に打合せを行い、リメディアル授業との連携も含めてマネジメントに携わった。中間・期末試験においては、推薦入学者やリメディアル授業受講者を中心に成績分布を精査し、習熟度別クラス導入の効果について詳細に分析することで、次年度に向けて授業改善の方策を検討した。

一方、教育企画室員として、TA 制度改革（特に、「スポーツ」及び「情報科学」における SA の試行的導入とその効果の検証）や共通教育授業アンケートの企画等にも携わった。

いずれの取り組みも、多くの教職員と連携・協同し、その科目への理解を深めることで、より良いマネジメントの一助をめざすという点で共通している。

## グローバル COE および GRC の運営への高い貢献

地球深部ダイナミクス研究センター 入舩 徹男 教授

GRC を中心とするグローバル COE プログラム「地球深部物質学拠点」のリーダーとして、拠点の立ち上げと運営において中心的役割を果たしてきた。この結果、同プログラムは予定通りに実施されており、COE 教員・研究員の採用人事や高度化支援室などの体制の確立、また本来の目的である教育・研究両面においても重要な成果があがりつつある。一方で拠点の中核である GRC のセンター長として、この間の多数の GRC における教員採用や昇任人事も、中心となりすすめており、10 年目を迎えている GRC の発展において大きく貢献している。また GRC 関係のみならず、愛媛大学評議員、関連学会の役員を務める一方で、SPring-8 の利用者懇談会において地球惑星科学分野代表を務めるとともに、利用促進委員や評議員としてその運営において大きな貢献をしている。SPring-8 は同 COE の連携先でもあり、このような貢献や研究面での GRC の成果に基づき、GRC の研究グループは同施設において、平成 22 年度より 5 年間の予定でパワーユーザーに指定されている。

## 宇宙進化研究センター公開講演会

宇宙進化研究センター 谷口 義明 教授

宇宙進化研究センターでは 2007 年 11 月の発足以来、年 1 回から 2 回のペースで、公開講演会を行ってきた。現在までに 4 回の公開講演会、日本天文学会との共催で「全国七夕会講演会」、および全学対応の公開講演会をそれぞれ 1 回ずつ開催してきた。（2010 年度も 2 回の講演会の開催が決まっている：7 月及び 10 月）。この公開講演会の開催目的は 2 つあり、

一つは

「市民・県民の皆さんに広く天文学に親しんでもらう」

ことであり、もう一つは、

「本学および宇宙進化研究センターの認知度のアップ」

である。今までの実績では、常に 100 名を超える参加者を得ており、リピーターの方々も多い。また、参加者は松山のみならず、今治から宇和島方面を含め、広く県内から来られている。このように定期的に公開講演会を行うのは、講演テーマの設定と講師の方々への依頼を考えると、なかなか大変ではある。しかし、公開講演会の開催を宇宙進化研究センターの定期的な事業として運営することで、本事業の目的である、本学、本センターの認知度のアップと天文学の普及に大きな貢献をしていることを実感しているので、今後も開催していきたい。